

2009年3月3日

新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第4・5・6班合同研究会

## 秋田茂著『イギリス帝国とアジア国際秩序』を読みながら比較帝国史を考える

北海道大学スラブ研究センター

宇山 智彦

### 1. 帝国研究の先導役たるイギリス帝国史研究の中での位置づけ

①行政史、②経済史、③帝国主義論、④ポストコロニアル論のいずれでも、イギリス帝国史には豊富な研究蓄積。

本書は②を中心に①の要素を加えつつ、グローバル・ヒストリーにつなげようとするもの。

地域的にはアジアが舞台だが、イギリス本国（ブリテン）の複合性・多様性に注目するアプローチ（松里 [2008] がロシア・清との比較に利用するのはこれ）とはどう関係するか？

③④とはどのように接合するか？たとえば木畑 [2008] は秋田と同様「比較と関係」を掲げるものの、肌合いが大きく異なる。

### 2. イギリスとロシアの植民地支配の比較可能性（特にインドと中央アジア）

露領中央アジアと英領インドは同時代にも後世でもよく比較される（Terent'ev [1875], Wheeler [1964], Morrison [2008]；どちらの統治が「寛容」か、効率的かなど）。

総督制としての比較可能性と根本的な違い：インドは予算も軍も本国とは別（それゆえ本書で活写される軍の経費負担問題が起きる）、中央アジアはロシアの国家体制・財政・軍事の一体性を前提としたうえでの実質上の独自性。財政面の位置づけではフィンランドや初期のポーランドの方がインドにやや近い（Pravilova [2006]）。議会制の違いも重要。

統治コストの問題：中央アジアについては、経済的にロシアに益をもたらしているのか否かがしばしば議論に（のちのソ連崩壊時にも）。本書で言及される「帝国主義経費論争」は主に軍事費をめぐるもののようなのだが、インド統治そのものが本国に経済的利益をもたらすことは自明視されていたのか？

インド軍：極めて興味深い。もしインド人兵士の手紙や信仰生活についての研究があれば、長縄 [2004] のヴォルガ・ウラル出身ムスリム兵士についての研究と比較可能に。ロシアは中央アジア人に武器を持たせることを恐れ、また彼らの兵士としての能力を疑っていたため徴兵しなかったが（宇山 [2006]）、インド人についてそのような議論はなかったのか？

南アフリカ戦争が「白人の戦い」と見なされ、インド軍が限定的にしか派遣されなかったことはイギリスの人種観・世界観として興味深い。第一次世界大戦時にインド人にヨーロッパで戦わせる時にはどのような議論？（ロシアはナポレオン戦争でも第一次大戦でも東方諸民族をヨーロッパで戦わせた）

### 3. 帝国の自己認識と他者認識

イギリスの経済利害と東アジアの工業化が相補的であったことを、主にイギリス人官僚らの報告書から抽出：帝国の「自画像」である可能性。同時代のアジア人による分析は？

現地エリート層の協調、「帝国臣民」の論理の利用：他の帝国とさまざまな側面から比較可能（たとえば Uyama [2003]）。欧米・日本におけるロシア帝国史研究で、帝国と現地民の関係を対立とのみ見る図式を解体したのは、Khalid [1998] や宇山 [1997] のように中央アジアの現地語史料を使う研究者。したがって相補関係の限界も強く意識（結局は力の差のある非対称関係の中での相互作用）。

報告書の性格：イギリスの経済活動のさまざまな問題点を指摘しつつも、最終的には中国がイギリス製品市場として拡大していくことを楽観。本気なのか、それとも政府・上司に都合のよいことを書きたい官僚の心性？

言説上の特徴：「威信」、「寛容」、「名声」→他の帝国の語彙との類似、合理的な利害との齟齬の可能性。

### 4. 帝国の作る国際秩序とは何か

パクス・ブリタニカ論の射程範囲：帝国の支配下で一定の平和が保たれることはよく指摘されるが、グローバルな平和には貢献したのか？ 19世紀後半・20世紀前半は戦争の世紀ではないか？

ゲームのルール（特に自由貿易）の設定：イギリス帝国でなければできなかったこと？ グローバルな趨勢？（オタワ体制が「開かれた」ものになったのは、イギリスの意図ゆえなのか、意図に反してか？）

金融・サービス資本の論理と産業資本の論理の違い（本書は前者を重視するが具体的なアクターとしての姿は描かれていない）：イギリスそのものの利害の多様性？ 省庁間の方針の違いとどう結びつくか（比較の論点になりうる）。

### 5. 帝国(単数)システムか帝国(複数)システムか

本書のところどころに出てくる他の列強（米国、日本、ドイツ、フランスなど）との対抗と協調。イギリスの意図は必ずしも実現しない。上海の共同租界の重要性。

イギリス単独のヘゲモニーを前提とするよりは、諸帝国・強国の形作るシステムとして当時の世界をとらえたいうえで、その中でイギリスの果たした役割を考えては？

帝国間の資本の流れと政治的同盟の関係：ロシア帝国への欧米諸国（特にフランス）資本の導入をめぐる闘争（cf. ラウエ [1977], 中山 [1988]）。

19世紀ユーラシアでイギリスの勢力拡大を強力に阻んだロシア：グレートゲームや東方問題再考の必要性。

### 6. 帝国崩壊過程の研究としての読み替え

ヘゲモニー国家から「構造的権力」への移行自体、イギリス帝国の弱体化を反映。

本書は世紀転換期と戦間期を主に扱うが、両世界大戦の意味（第二次世界大戦については終章で略述）に注目することで他の帝国の崩壊過程と比較可能になるのではないか。

ロシア帝国とオスマン帝国は第一次世界大戦を重要要因として崩壊（ロシア革命が反帝国主義を拡大させるという連鎖も重要。インドへの影響？）。

和田 [1992] のソ連観：ソ連（国家社会主義）は世界戦争の時代の始まりと共に成立し、その終わりと共に崩壊。

## 参考文献

宇山智彦「20世紀初頭におけるカザフ知識人の世界観：M. ドゥラトフ『めざめよ、カザフ！』を中心に」『スラヴ研究』44号、1997年。

宇山智彦「「個別主義の帝国」ロシアの中央アジア政策：正教化と兵役の問題を中心に」『スラヴ研究』53号、2006年。

木畑洋一『イギリス帝国と帝国主義：比較と関係の視座』有志舎、2008年。

長縄宣博「日露戦争期ロシア軍の中のムスリム兵士」『ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア II（「スラヴ・ユーラシア学の構築」研究報告集5）』北海道大学スラヴ研究センター、2004年。

中山弘正『帝政ロシアと外国資本』岩波書店、1988年。

松里公孝「境界地域から世界帝国へ：ブリテン、ロシア、清」松里公孝編『ユーラシア：帝国の大陸（講座スラヴ・ユーラシア学3）』講談社、2008年。

T. H. フォン・ラウエ（菅原崇光訳）『セルゲイ・ウイッテとロシアの工業化』勁草書房、1977年。

和田春樹『歴史としての社会主義』岩波新書、1992年。

Adeeb Khalid, *The Politics of Muslim Cultural Reform: Jadidism in Central Asia* (Berkeley: University of California Press, 1998).

A. S. Morrison, *Russian Rule in Samarkand 1868–1910: A Comparison with British India* (Oxford: Oxford University Press, 2008).

Ekaterina Pravilova, *Finansy imperii: Den'gi i vlast' v politike Rossii na natsional'nykh okrainakh, 1801–1917* (Moscow, 2006).

M. Terent'ev, *Rossia i Angliia v Srednei Azii* (St. Petersburg, 1875).

Uyama Tomohiko, "A Strategic Alliance between Kazakh Intellectuals and Russian Administrators: Imagined Communities in *Dala Walayatining Gazetī* (1888–1902)," in Hayashi Tadayuki, ed., *The Construction and Deconstruction of National Histories in Slavic Eurasia* (Sapporo: Slavic Research Center, 2003).

Geoffrey Wheeler, *The Modern History of Soviet Central Asia* (New York: F. A. Praeger, 1964).